

すべての子らに本の

第35回北海道子どもの本のつどい 留辺薬

「子どもたちの瞳に映るもの」を大会テーマに、第35回北海道子どもの本のつどい（実行委、北海道子どもの本連絡会、読売新聞北海道支社主催）が8月4、5日の両日、留辺薬と置戸を会場に開催されました。全道各地から集まった約300人の参加者は、計11の分科会での語り合いなどを通してあらためて本を読む楽しさを学びました。その中から、写真家長倉洋海さんの講演や交流会、一部の分科会の様子などについて紹介します。

講演

開会式に続いて、「アフガニスタンから東北の被災地へ～子どもたちからの元気便」と題して長倉洋海さんの記念講演が行われました。「リフレッシュするにはちょうど良い季節に北海道へ帰って来ることができました」と語り始めた長倉さん。自身が昨年9月から12月にかけて撮影してきた東日本大震災で被災した東北3県の子どもの写真を大スクリーンに映し出し、現場での体験談などを紹介。「今回の撮影を通して一番強く感じたのは子どもたちの力。子どもたちの笑顔の奥に垣間見る切なさや悲しみ、同時にそのつらさを乗り越えようとする明るさやたくましさを感じ取っていただければ幸いです」などと話していました。



長倉洋海さん プロフィール

1952年北海道釧路市生まれ。通信社勤務を経て、80年よりフリーの写真家となる。アフリカ、中東、中南米、東南アジアなど世界の紛争地

を訪れ、そこに生きる人々を見つめ続けている。昨年9月から12月にかけて福島、岩手、宮城の子どもたち取材、撮影、子どもたちの作文と写真を合わせた『だけど、くじけない 子どもたちからの元気便』（NHK出版）を2月末に出版した。



交流会

置戸・留辺薬の空と大地を五感で味わってもらおうと、愛情たっぷりの手作り料理でおもてなし。ルーを仕込んで3週間ねかせてつくる置戸の給食カレーをはじめ、牛乳豆腐や留辺薬産白花豆の甘納豆など、地元の旬の素材を使った絶品料理の数々がふるまわれ、参加者にとってはおなかもココロも大満足の楽しい交流会となりました。